

外科通論

佐藤進講義  
門人筆記

廿三



佐藤進講義  
門人筆記



# 外科通論

明治十三年一月  
廿九日版權免許

佐藤尚中藏版

外科通論卷之二十三

佐藤進講義

門人筆記

第四十六章

乳嘴腫

○腺腫

皮膚及粘膜腺腫

○新生囊腫

囊腫

乳嘴腫

或ハ疣腫

筋神經及々結締質ヨリ生スル新生物即チ贅腫

ハ以上既ニ之ヲ論說セリ是ヨリ以下章ヲ逐テ

論說セントスル者ハ即チ胎生學ニ由テ明ナル



胎兒ノ上下二種葉ニ屬スル真ノ内皮ヨリ主ト

ノ構成セラル、新生物ナリ

内皮ハ平常皮膚粘膜腸粘膜ノ絨毛体及ヒ腺ニ存在メ

之カ成形ヲ助クルモノナリ而シテ皮膚又ヒ粘

膜ノ乳嘴ノ形狀ニ從ヒ或ハ波狀ヲ成シ或ハ指

狀ノ隆凸ヲ成メ其表面ヲ被フ而メ腺ニアリテ

ハ彎曲形成ハ圓柱形ヲ成シ皮膚粘膜ノ表面ヨ

リ陥凹シテ其裡面ヲ被フ者ナリ如此キ内皮ノ

形成過多症モイベルブラーハ皮膚粘膜ノ乳嘴体ニアリテハ之

ヲ乳嘴腫ト云ヒ腺ニアリテハ之ヲ腺腫ト云フ



此二種ハ共ニ結組織及ヒ血管ヲ新生スルモノ  
ナリ  
皮膚ニ生スル化角性乳瞷腫ヲ區別メ二種トナ  
ス

イ 疣 ワルセン

解剖上ニ之ヲ檢スルトキハ乳瞷ノ其長  
サト其厚サヲ非常ニ増加セシモノナリ而メ如  
此非常ニ腫大セシ乳瞷体ノ上表ニハ表皮化メ  
角質トナリ突起ス是レ即チ疣ナリ其原因詳カ  
ナラス体中殊ニ該腫ヲ簇生スル部ヲ手トナス  
而メ黍ヨリ豌豆大ニ至ルモノナリ

口皮角 疣ノ

増大ヲ極メシ

者ニ外ナラス

即チ増大セシ

乳嘴ノ表皮互

ニ相集着メ一

ノ硬固ナル物

質ヲ成形ス其

形長クシテ直

ナル者アリ彎

第九十九圖

イ 乳嘴腫

即チヲ縦

斷セシ者

イ

口 同腫ヲ

横斷セシ

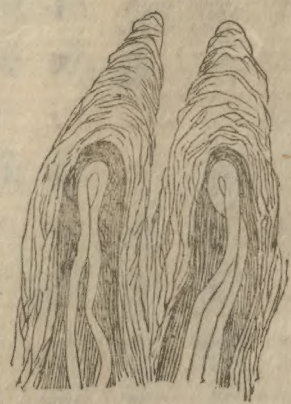
者

真物ニ比

スレハ其

大サ廿倍

口





曲スル者アリ而ノ其長サ凡ソ三寸ヨリ四寸或  
ハ之ヨリ長キニ至ルヲアリ抑モ皮角ハ表皮細  
胞ノ角質ニ化スルモノヨリ成ル而ノ其外形ハ  
諸獸ノ角ニ近似ス然レモ其解剖上ノ構成ニ於  
テハ差異ナキ能ハス如何トナレハ諸獸ノ角ハ  
骨質之カ基礎ヲ成セハナリ皮角ノ色ハ通常汚  
穢ノ褐色ナリ如此一種ノ病性產物ヲ生シ易キ  
部ハ之ヲ顔頭陰莖及ヒ他ノ部局トナス可シ又  
時トシテ粉質囊腫粉瘤ヨリ發生スルヲアリ  
疣及ヒ皮角ノ發生ハ之ヲ生シ易キ皮膚ノ素質



ニ歸スヘシ例之兩手ニ二十ヨリ乃至五十ノ疣ヲ同時ニ發生スルモノアルヲ以テ徵スヘシ殊ニ小兒或ハ可婚期前ニ生シ易シ而メ外来ノ刺戟大ニ之カ發生ヲ促スヲアリ殊ニ手ニ數多ノ疣ヲ生スル者ノ如キ即チ是ナリ而メ皮角ヲ生シ易キ素質ハ實驗スルヲ稀ナリト雖老人ニ多ク發生シ易シトス其他皮膚ニ蠕毛狀ノモノヲ生スルヲアリ是レ即チ表皮ノ化角ト乳嘴ノ肥大ヲ兼子タル症ナリ又魚鱗狀ノモノヲ皮膚ニ生スルヲアリ是亦表皮ノ鱗屑狀肥厚ヨリ生ス



ルモノニシテ多クハ先天ナリ  
疣ハ常ニ少年ノモノニ生ス而シテ多クハ自然  
ニ消滅ス民間ニ於テハ疣ヲ傳染性ノモノトナ  
ス是レ敢テ妄言ト為ス可カラス例之大趾ノ側  
面ニ疣ヲ生シ之ニ對側スル他趾ノ側面ニ同物  
ヲ發生スルモノアルヲ以テ知ルヘシ皮角ハ時  
トノ自然ニ脱落スルヲアリ然ル後再ヒ同物ヲ  
發生シ易シ加之既ニ皮角ノ消滅セシ部局ニ内  
皮癌ヲ更ニ生スルヲ必ナシトセス  
疣ハ之ヲ放置シテ別ニ治療ヲ加ヘサルモ妨ケ



ナシ他ノ諸疾病ニ於テ之ヲ見ルカ如ク其治期  
至レハ自ラ治スルモノナリ

疣ハ之ヲ治スルノ方民間ニ多シト雖簡易ナル  
法ヲ腐蝕法トナスヘシ殊ニ硫酸或ハ發烟消石  
精ヲ良トス其法疣ニ右ノ腐蝕藥ヲ塗擦セシ後  
第二日ニ於テ其腐蝕セシ部ヲ剪刀ニテ除去ス  
ルトキハ些少ノ出血ヲ見ルヘシ然ルトキハ其  
部ヲ再ヒ腐蝕スルヲ前ノ如シ此ノ如ク再三之  
ヲ施シテ全ク消滅スルニ至ルヘシ其他皮角ハ  
利刀ヲ以テ之ヲ生スル皮膚ト共ニ截除セハ根



治スヘシ

軟性即チ肉腫様乳嘴腫ナル者ハ結組織或ハ肉腫組織ヨリ構成セラレ而シテ其母基ヲ成ス所ノ内皮管ヲ以テ被ハル、者ナリ

真皮ニ肉腫様乳嘴腫或ハ時トシテ血管ニ富メ

ル乳嘴腫軟性乳嘴腫ヲ稀ニ生スルコアリ又時トシ

先天ニ鶏冠狀ヲ成シタル乳嘴腫ヲ顔ノ片側ニ

生スルコアリ粘膜ニ生スル夫ノ扁平及ヒ尖頭

コンヂロマタハ癰毒或ハ刺戟性ノ痲膿ニ由テ

生スル所ノ病性産物ニメ病床實際上ヨリ論ス



ルトキハ之ヲ贅腫ニ算入セス

粘膜ニハ肉腫様乳嘴腫ヲ生スルヲ必トカラス  
殊ニ子宮ノ膣部或ハ直腸及ヒ鼻孔ノ粘膜ニ生  
ス諸多ノ外科醫ハ之ヲ粘膜ポリープノ條ニ算  
入セリ此腫ハ其構成複雑ニメ腺ノ増大及擴張  
ヲ著シク見ハシ且ツ肉腫性ノ中間組織ヲ發見  
スヘシ多クハ莖ヲ具フル贅腫ナリト雖時トメ  
廣ク粘膜面ヲ侵スヲアリ  
乳嘴腫ハ傳染性ヲ具フルヲ稀ナリ然レモ別出  
後再生スルヲアリ而メ小兒ノ喉頭粘膜ニ廣ク



蔓延メ生スルヲ少ナカラスト雖恐ラクハ其原  
ヲ癰毒ニ取ル者ナルヘシ

腺腫

アデノ  
マ

往時ハ乳腺ニ生スル肉腫ヲメ腺ノ局部性成形  
過多ト做セリ如何トナレハ此肉腫中ニ乳腺ヲ  
發見スルヲアレハナリ輒近ニ至リテ乳腺ニ生  
スル肉腫中ニ腺ノ本体ヲナスアチヌスヲ新生  
スルト云説ハ大ニ疑團ヲ免カレスビルロード  
氏ノ實驗ニ據レハ乳腺ニ生スル眞ノ腺腫ナル  
者ハ甚タ稀ナリト云豫后多クハ良性ニメ惡性

ナルモノニアラス但解剖上構成ヨリ之ヲ論ス  
レハ良性ナルモノニアラスメ稍癌ニ近キモノ  
トナスヘシ

所謂攝護腺肥大ハ腺腫ヲ合併スルモノニアラ  
スシテロ<sup>ア</sup>チヌス<sup>ル</sup>擴張ト内皮ノ成形過多ヲ合  
併セシモノナリ故ニ既ニ論セシ如ク接護腺ノ  
肥大ハ蔓延性或ハ結節狀ノ筋腫ナリト云ヘシ  
外皮或ハ諸般ノ粘膜ニ存在スル腺ハ他腺ト同  
シク腺腫或ハ腺腫様肉腫ヲ生シ易シ而シテ胎兒  
ノ初メ腺ヲ發生スルカ如ク腺ノ内皮ヲ盛ニ發



生ス而ノ皮膚

ノ汗腺ニ腺腫

ヲ生スルヲ發

見セシモノア

リト雖甚タ稀

ナリ外皮ニ比

スレハ粘膜ニ

腺腫ヲ生スル

ト多シ殊ニ鼻

孔大腸子宮等

第百圖

一小兒ノ直

腸ニ生セシ

粘液

ボリ

腺腫ノ

一片

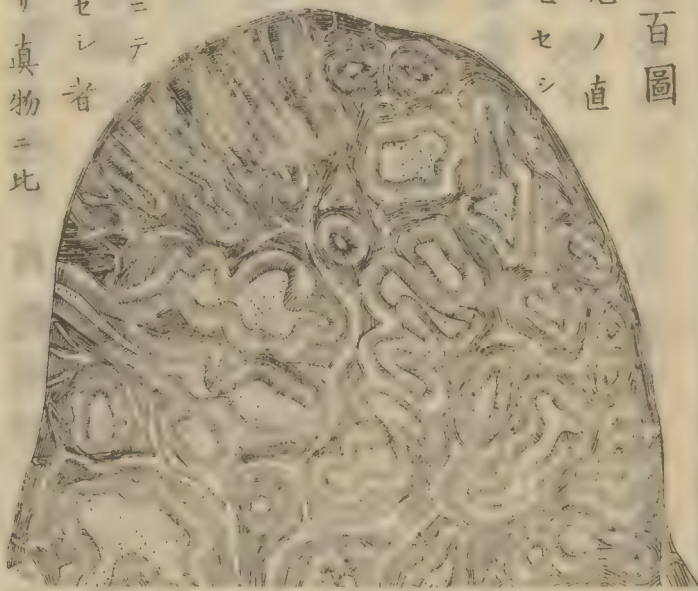
ヲ顯

微鏡ニテ

検査セシ者

其大サ真物ニ比

スレハ六十倍



ノ粘膜ニ生ス而ノ其性質膠性ニシテ浮腫様ノ  
結組織ヲ具フルモノナリ但シ肉腫組織ヲ具フ  
ルハ稀ナリ如此ク粘膜ニ生スル贅腫ハ之ニ粘  
液ボリープ<sup>1</sup>ノ名ヲ命ス其形狀皺襞ヲ具ヘテ其  
根脚廣キモノアリ或ハ結節狀ヲ成メ長キ莖ヲ  
具フルモノアリ而シテ其色性質及ヒ之ヲ被フ  
内皮等之ヲ生スル粘膜ニ同ナシ但シ表面ニ顫  
毛内皮ヲ具フル外聽道ノ軟性ボリープ<sup>1</sup>ハ此外  
ナリ粘液ボリープ<sup>1</sup>ハ悉ク腺ヲ具フルモノニア  
ラス耳ノボリープ<sup>1</sup>ノ如キハ腺ヲ具ヘス鼻孔大



腸殊ニ直腸ノ粘液ポリリ<sup>リ</sup>ハ多クハ新生セシ  
粘膜腺ヨリ構成セラル而シ其腺端ハ百圖ニ示  
スカ如ク擴張シテ粘液囊腫ヲナス<sup>コ</sup>アリ其解  
剖的構成ト其形ニ從テハ純粹ノ腺腫<sup>例之小</sup>  
腸粘液ポリリ<sup>ニ</sup>於ルハ肉腫<sup>鼻孔ノ粘液ボ</sup>  
如シ百圖ヲ参考スヘシ  
属一ハ浮腫性ノ纖維腫一ハ粘液性肉腫等ニ属  
スヘシ

粘液性ポリリ<sup>プ</sup>ヲ發生シ易キ素質ハ小兒ノ時  
ヨリ凡ソ五十ノ年齢間ニアリ小兒ニアリテハ  
直腸或ハ大腸ニ發シ易シ孤立スルアリ或ハ同

時ニ簇生スルコトアリ數多ヲ簇生スルハ小兒ヨ  
リ大人ニ多シトス其他三十二三ノ年齡ニ於テ  
子宮ニ粘液ポリープリヲ生スルコト多シ時トノ惡  
性ナル癌様ノ者ニ變性スルコトアリ

右ニ論スル粘液ポリープリ中殊ニ再發シ易スク  
ノ頑固ナルモノヲ鼻孔ポリープリトナスヘシ故  
ニ三四回四回術ヲ施コソ除去スルニアラサレハ  
全ク消滅ニ至ラサルモノナリ

顯微鏡ニ由テ鼻孔或ハ子宮ニ生セル粘液ポリ  
ープリヲ檢スルハ浮腫性ノ結組織ヨリ成ルモ



ノナリ而メ其經過豫後ニ至リテハ浮腫性ノ結  
組織ヨリ成ルモノヲ以テ最モ良性トナスヘシ  
鼻孔粘液ポリープ<sup>1</sup>ノ療法ハポリープ<sup>1</sup>鉗子ヲ以  
テ之ヲ擢去スルヲ容易ニメ且ツ確實ナリトス  
外聽道粘液ポリープ<sup>1</sup>ニ於ケルモ之ニ同シ而メ  
子宮及直腸ノポリープ<sup>1</sup>ハ其根基部ヨリ剪刀ニ  
テ截除スルヲ良トス若シ出血ヲ恐ルハトキハ  
結紮法或ハイクラセウルヲ用フヘシ

甲狀腺ノ贅腫ハ中古ヨリ之ヲストルマ<sup>2</sup>此ニ甲  
ト譯スト雖原名ハ頸水脈<sup>3</sup>狀腺腫  
腺腫脹<sup>4</sup>即チ瘰癧ノ義ナリト云固ヨリ其名稱妥

當ナラス病理解剖上ヨリ之ヲ論スルトキハ全  
 甲狀腺著シク腫張スル者アリ或ハ腺中限局メ  
 病ニ罹ル者アリ抑單易ノ甲狀腺囊腫即チ所謂  
 囊腫様<sup>ストロマチスチカ</sup>甲狀腺腫ヲ除クノ外ハ<sup>ストルマ</sup>甲狀腺腫ノ種類  
 ニ屬スルハ即該腺ニ生スル單純ノ腺腫トナス  
 ヘシ此腺腫ノ組織ノ性質ハ甚タ諸般ナルモノ  
 ナリト雖未タ變質機ヲ續發セサルキニ在リテ  
 ハ之ヲ截斷シ肉眼ニテ其面ヲ檢スルキハ其性  
 質健全ノ甲狀腺ニ異ナル所ナシトス若シ顯微  
 鏡ニ由テ之ヲ檢スルキハ著シキ變化ヲ見スト



雖其中ニ結組織ヨ

リ成レル數多ノ囊<sup>カプセル</sup>

膜<sup>セバ</sup>ヲ發見スヘシ而

ノ囊膜中ニ多ク圓

キ細胞ヲ混スル透

明ノ粘膠物ヲ含蓄

ス<sup>圖ヲ見</sup>ルヘシ此ノ囊膜

ノ大小一ナラス其

小ナルモノハ只細

胞ヲ有スルノミニ

第一百圖

通常ノ

硬性甲

狀腺腫

ノ一部

ニ於テ

血管ヨ

リ色料

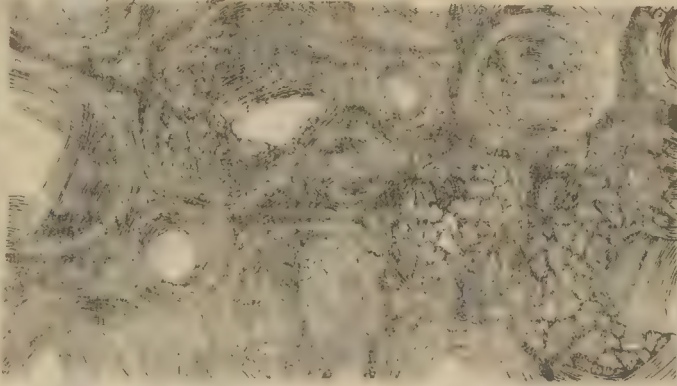
ヲ注入

セシ者

其大サ

凡ソ百

倍



シテ粘膠物ヲ含マス

甲狀腺腫ニ多ク併發スル變化ハ即チ其中ニ囊腫ヲ發生スルニ在リ是レ他ナレ腺ノ胞狀体ヲ成スモノ次第ニ擴張シ遂ニ混同シテ一ノ大胞ヲ成シ其中ニ稠厚ノ粘膠物ヲ含有ス此變化ノ外經過久レキ甲狀腺腫ニアリテハ常ニ血液ノ溢出ヲ見ルヘシ而ソ其大半既ニ吸收セラレ多シノ色素ヲ殘留ス其他古キ甲狀腺腫ニハ乾酪變質コレステアリンヲ有スル脂肪變質或ハ石灰變質ヲ生スルヲアリ總テ如此續發性變質



ハ最初甲狀腺腫ニ見ハル諸形狀ヲ全ク變化セ  
シム而シテ甲狀腺腫ハ頸ノ正前ニ生シ或ハ其  
片側或ハ兩側ニ生スルヲアリ或ハ同時ニ簇生  
スルヲアリ或ハ孤生スルヲアリ若シ著シク増  
大スルキハ氣管ヲ壓迫シ之ニ由テ窒息ヲ招ク  
ヲナキニアラス殊ニ兩側ニ肥大ヲ生スルトキ  
ハ最モ危險ナリトス

甲狀腺腫ハ風土病トナリ發スルヲ奇ナリト云  
ヘシ殊ニ山國ニ多シ即チ獨乙國瑞典奧國等ニ  
在ル山國ニ多シトス其他印度ヒマラヤ山及ヒ

「<sup>1</sup>」ラレリエシノ山國ニ多シ人或ハ其原因ヲ飲  
 水或ハ土質等ニ歸スト雖是精確ノ實驗ニ出ル  
 モノニアラスシテ臆説タルヲ免カレス然レモ  
 氣候ノ變等之カ源トナルヲ殆ト疑ナシ而シテ  
 人之ニ罹リ易キ素質ヲ具ナル者ナルヤ否未タ  
 知ル可カラス夫ノケレチニスムス<sup>1</sup>精神及身体  
 ナラサノ人之ニ罹リ易キヲ疑フ可カラス然レ  
 ルモ<sup>1</sup>精神及身体ノ發育健全ナル者之ニ罹ル<sup>1</sup>ク  
 レチニスムス人ヨリ却テ多キヲ覺ウヘシ甲狀  
 腺腫ハ稀ニ先天ナルモノアリ而シテ可婚期ノ



初ニ發スルモノ少ナカラス該病ノ經過諸般ナ  
リト雖其極度ニ達スルニハ五十年ノ久レキヲ  
經ルモノ稀ナリトス或ハ其發育中止レテ健康  
ニ著レキ害ヲ為サ、ルモノアリ然レモ時トノ  
其性不良ニレテ癌ノ如ク近傍ノ水脈腺ヲ侵ス  
モノアリ即チ癌性甲狀腺腫ナリ其他動脈<sup>ストルマ</sup>瘤<sup>マアチ</sup>性  
甲狀腺腫<sup>サリスマチカ</sup>ナル者アリト雖是レ甲狀腺腫中ニ分  
佈スル動脈非常ニ擴張セシモノニ外ナラス  
療法奏効ノ最モ著レキモノヲ沃顛劑トナス殊  
ニ初期ニ於テ効アリ即チ沃度加里ヲ内服セシ

ノ或ハ沃顙丁幾ヲ外用スヘシ又肥大セシ甲狀腺或ハ腺腫ノ剔出ハ危險ノ出血或ハ手術ノ為ニ衰弱ニ陥キリ速ニ死ヲ促カスヲナキニアラサルヲ以テ可及的施コサルヲ良トス總テ甲狀腺腫ニ手術ヲ施コスニハ豫メ手術ニ由テ危險症ヲ招クヘキヤ否ヲ確定セサル可カラスト雖少レク實驗ヲ經レ者ニアラサルヨリハ之ヲ確定スルヲ大ニ難シ少年ノ者ニアリテ頸ノ中央ニ生シ動移シ易キ甲狀腺腫ハ幸ニメ危險症ヲ發スルヲナク剔出スルヲ得ヘシト雖肥大セ



シ甲状腺ノ側辨ニ深ク侵入スルモノハ其腫小  
ナル者ト雖之ヲ剔出スルヲ困難ニシ且ツ危険  
ナリトス總テ甲状腺腫ヲ剔出セントスルニハ  
宜シク注意ヲ要スヘシ即チ手術ヲ施コサント  
スルニハ出血ノ恐アルヲ以テ其動脈及靜脈ヲ  
豫メ其近部ニ於テ皮膚ト共ニ括約スヘシ手術  
中該腫ノ分界ヲ具フル者ヲ除去セントスルニ  
ハ可及的刀或ハ剪刀ヲ用ヒスメ指頭或ハ溝探  
針或ハ鈍器等ヲ用フヘシ否ラサレハ脈管ヲ破  
損シ危険ノ出血ヲ招クヘシ

進曰余實駁スルニ此技術ハ只甲狀腺腫ノ別  
出ニ用アルノミニアラス頸或ハ腋下等ニ深  
在スル各種ノ贅腫ヲ別出スルニ最モ緊要ト  
ナス

其他「リ」ユツケ氏或ハ「ストルク」及ヒ「レワルベ」等ノ  
諸氏ハ該腫中ニ沃顛丁幾或ハ純粹ノ亞兒箇爾  
ヲ注入スルヲ稱ス即チ之ニ由テ全ク萎小セ  
レハルヲアルヘシ然レ氏時トシテ奏効ナク或  
ハ却テ害ヲ招クヲナキニアラス殊ニ亞兒箇爾  
ノ注入ハ劇シキ炎症ヲ續發シ或ハ化膿后腐敗



熱ニ陷キルコアリ沃顛丁幾ノ注入法ハ一時炎  
症ヲ起スト雖亞兒箇爾ニ比スレハ速ニ經過レ  
去ルモノナリ總テ右ノ注入法ハ之ヲ持長ヤサ  
レハ効ヲ奏シ難レ

囊腫<sup>チリスチン</sup>

囊腫トハ流動物或ハ糜粥様物ヲ含有スル囊ヲ  
總稱ス而シテ該腫ヲ生スルニ二種アリ即チ体  
中曾テ囊様ノ形狀即チ空洞ヲ具フル者ヨリ生  
スル者アリ<sup>即チ真</sup>或ハ空洞ヲ具フルコナキ部  
ニ新生スル者アリ<sup>即チ之ヲチスト</sup>又數多  
<sup>ト名ク即チ新生囊腫</sup>

ノ囊腫相合集シテ一囊腫ヲ成スモノアリ之ヲ  
複性囊腫ト云其他以上論述スル各種ノ贅腫中  
ニ新タニ囊腫ヲ生シ以テ其腫ノ一部ヲ成スモ  
ノアリ之ヲ生スル贅腫ノ異ナルニ從ヒ囊腫様纖  
維腫囊腫様肉腫囊腫様軟骨腫囊腫様癌腫ト稱  
命ス抑モ囊腫ヲ大別スルハ既ニ空洞ヲ具フ  
ル者ト之ヲ具ヘサル者ヨリ新生スルモノトス  
甲 空洞ヲ具フル者ヨリ生スル囊腫<sup>カイルシヨウ</sup>  
氏ハ空洞ヲ具フル者ヨリ生スル囊腫ヲ區別ノ  
三種トナセリ即チ溢血ノ周圍ニ囊膜ヲ具フル



者ヲ血腫

血腫ハ血性  
腫ス

トシ又水様液ノ漏出ニ因スル

者若シクハ沔乙膜ノ分泌過多ヨリ沔乙液ヲ渚

蓄スルモノ

陰囊水腫 腦水腫 關節水腫 鞘水腫

等之ヲ合稱シテ

渗出性囊腫

ト名ケ而シテ諸腺ノ排出管閉止ヨリ

生スルモノヲ

分泌閉止性囊腫

ト名ケリ此ニハ

内科或ハ婦人科ニ属スルモノハ論セズ只外科

所屬ノ囊腫即チ皮膚及粘膜ノ諸腺ヨリ發スル

囊腫ヲ論スヘシ即談腫ヲホリクラール囊腫ト云

ホリケルハ小囊ノ義即チ囊形ノ小腺ヲ云真皮ノ諸腺中囊腫ヲ生ス

ル者ハ只脂腺ノミニメ汗腺ヨリ囊腫ヲ生スル

「ナシ」腺脂腺中ニ其分泌液ノ鬱閉スル原因ハ  
一ハ分泌液ノ濃厚トナルニ因リ一ハ其排出管  
ノ閉塞スルニ因ルナリ若シ此原因ニ由テ分泌  
液腺中ニ鬱滯シ曾テ「アチヌス」腔内ノ彎曲セル  
分泌面ハ其壓力ヲ受ケテ擴張シ變シテ球形ヲ  
ナスモノナリ如此鬱積セシ分泌液器械的ニ其  
周圍ノ結組織ヲ刺戟スルハ結組織漸次肥厚  
シ即チ囊様膜ヲ成メ分泌液ヲ包被ス分泌液未  
タ多ク鬱滯セス且ツ之ヲ包被スル囊様膜大ナ  
ラサルモノハ壓迫ニ由テ之ヲ排出セシムルヲ



ヲ得ヘシ此ノ如ク未タ排泄口ヲ全ク收メサル  
小囊腫ヲ即チ粉刺ニキビ刺コメドト云若シ刺戟性炎機  
ニ由テ脂腺ヲ侵シ且ツ其排出管全ク閉鎖セラ  
ル、トキハ腺ノ消耗ヲ續發スルヲ夫ノ火傷ニ  
由テ皮膚ノ表面ヲ荒敗スル片ニ於ケルカ如シ  
若シ腺ノ分泌機ヲ全ク失ハサル者ニアリテハ  
其腺ノ分泌面漸次擴張シテ遂ニハ囊狀ヲ成ス  
モノナリ而シテ其中ニ糜粥様ノ脂肪或ハ表皮ヲ  
含藏スル者ハ之ヲ「アテローム」粉瘤ト名ク顯微鏡  
ニ由テ此含藏物ヲ檢査スル片ハ滴狀脂肪、脂肪

結晶殊ニコレステアリン<sub>肝脂</sub>表皮細胞等ヲ發見  
スヘシ而シテ其色及硬軟等諸般ニシテ一様ナ  
ラス老人ノ毛髮ヲ具フル頭部ニ生スル囊腫ノ  
含藏物ハ多クハ汚穢ノ帶褐灰白色ヲ帶ヒ且ツ  
甚シキ臭氣ヲ帶フル糜粥様物ナリ而シテ之ヲ  
包被スル囊ハ通例薄クシテ結組織ニテ構成セ  
ラル而シテ其内面ニハ著シク粘液管ノ乳嘴狀  
ヲ成メ隆起スルヲ見ル時トシテ囊腫ノ含藏物  
ハ石灰ニ變質スルヲアリ其他囊腫ハ衝突打撲  
等ノ外傷ニ由テ破開スルヲアリ或ハ稀ニ自然



ニ破開スルヲアリ然ルトキハ其含有物ヲ漏出  
シ其破口ノ邊緣外ニ向テ翻リ即チ囊ノ裏面潰  
瘍ニ變スルモノナリ体中囊腫ヲ生シ易キ所ヲ  
頭及ヒ顔トナス他部ニ生スルハ稀ナリ  
右ニ論スル如ク空洞ヲ具フル者ヨリ生スル囊  
腫ノ外第二種ニ属スルモノヲ「コレスデアリン」  
ステニ<sup>皮膚様</sup>囊腫ト云談腫ノ含藏物ハ其色白クメ  
表皮細胞及ヒ肝脂コレステアリンヲ多ク含ムモノナリ囊腫ノ  
裡面ニ毛囊ヲ具フル者アリ或ハ汗腺ヲ具フル  
者アリ即チ皮膚ト其性狀ヲ同フス是レ皮膚様

囊腫ノ名アル所以ナリ而ノ體中眼窩ノ周圍ニ  
發スルヲ最トモ多シトス多クハ先天ナリ人或  
ハ談腫ヲシテ皮膚腺ノ非常ニ深在シ或ハ其括  
斷セシ一片自ラ發育シテ談腫ヲナスト云ヘリ  
而シテ頸ニ發スルモノハ顚裂<sup>キーンガシク</sup>顚裂<sup>顚裂</sup>弓<sup>ハ</sup>左右兩側  
弓ノ間隙ヲ顚裂ト云胎兒第二月ニ至ツテ合  
閉ス其詳細ナルヲハ胎生學ニ就テ知ルヘシ其  
内外兩部ニ於テ閉鎖シ其中部ニ於テ其空腔閉  
鎖セシテ開口スルトキハ年月ヲ經ルニ從ヒ  
其内面ヲ被フ所以表皮胞集積シ之レニ由テ即  
チ囊腫ヲ生發スルナリ而シテ内部ニ入リテハ

之ヲ口内ニ現發シ所謂舌下ニ生スルヲ外  
部ニアリテハ或ハ頸ニ發シ即チ甲狀腺ノ上部  
或ハ其後部ニ顯ハル、トアリ  
粘膜ニアリテハ其腺ノ分泌液濃厚トナリ之ヲ  
排出スルヲ容易ナラサルニ因シテ粘液囊腫ヲ  
生スルナリ殊ニ排出管ノ閉塞ヨリ此分泌閉止  
性囊腫ヲ生スルヲ多シ該腫中含ム所ノ分泌液  
ハ粘膠質ニメ其色ハ黃色ニメ蜂蜜ノ如シ之ヲ蜜腫ト云  
ト云或ハ帶紅黃色ナルトアリ或ハシヨコラード  
ノ如ク褐色ナルトアリ顯微鏡ニテ之ヲ檢査ス



ルハ粘液中顆粒狀ヲナシタル脂肪ヲ有スル  
大ナル無數ノ圓形細胞及ヒ多量ノ肝脂ノ結晶  
物ヲ發見スヘシ鼻粘膜ニハ粘液囊腫ヲ生スル  
ト必ナカラス即チ鼻粘液ボリープ<sup>ル</sup>中ニ生ス加  
之同時ニ數多ヲ生スル<sup>ル</sup>アリ又<sup>ル</sup>バイモル<sup>ル</sup>洞ニ  
生スル<sup>ル</sup>ト必ナカラス其他口粘膜ニハ該囊腫ヲ  
生スル<sup>ル</sup>ト必ナカラス殊ニ唇ノ内側ニ生シ易シ  
頬ニ生スルハ稀ナリ子宮粘膜或ハ子宮ノ粘液  
ボリープ<sup>ル</sup>中ニ粘液囊腫ヲ生スル<sup>ル</sup>アリ之ニ反  
ノ直腸粘膜ニハ粘液囊腫ヲ生スル<sup>ル</sup>トナシ總テ

体中深處ノ粘膜ニ生スルハ稀ナリトス

〔乙〕新生囊腫該腫ハ空洞ヲ具ヘサル部ニ生スル

者ニイ即曾テ疾患ニ罹ル組織細胞ニ由テ滲淫

セラレ或ハ硬キ贅腫ノ軟化ニ陥アルニ由テ生

スルモノナリ既ニ著シク囊ト其中ニ含有スル

流動物トノ分劃定マル后其囊ノ裏面ヨリ流動

物ヲ分泌シテ漸次増大スルモノアリ即チ軟化

ヨリ生ヤレ囊腫更ニ變ノ分泌性囊腫或ハ滲出

性囊腫ト成ル總テ細胞ニ富メル組織ハプロト

プラスマノ粘液性變質ニ因テ囊腫ニ變スルナ

リ是ノ機能ハ胎生學ニ於テ人ノ知ル如ク軟骨  
 組織ノ粘液性軟化ニ由テ空洞ヲ造リ即チ關節  
 ノ形成スルト一般ナルモノナリ而シテ軟骨腫  
 ノ各所ニ於テ粘液性軟化ヲ發見スルヲ以ナカ  
 ラス即チ軟骨腫ニ粘液囊腫ヲ合併セシモノナ  
 リ其他粘液腫<sup>ニキソ</sup>中ニ空腔ヲ成形シ或ハ其中ニ流  
 動物ヲ含有スルヲ以ナカラス又肉腫中ニモ一  
 様ノ變化ヲ見ハストアリ殊ニ最大胞肉腫ニ由  
 テ之ヲ見ル又披裂セルカ如キ間隙ヲ見ハシ而  
 ノ其裏面滑澤ニシテ其中ニ洶乙液様若クハ粘



液様物ニ液性ノ流動物ヲ含蓄スル嚢腫アリ常  
ニ子宮ノ筋腫中ニ併發スルモノナリ是蓋シ著  
シク擴張セシ淋巴空腔ニ外ナラサルヘシ其他  
骨嚢腫ハ常ニ最初骨ノ軟化ニ由テ生スルモノ  
ナリ但シ時トシテ滑澤ナル膜様物ヲ其裏面ニ  
具ヘ且ツ經過中流動物ヲ分泌スルコアリト雖  
稀ナリトナスヘシ

右ニ論述スル二種ノ嚢腫ノ外其中間ニ位シテ  
其發生ノ性狀ヲ詳明スルコト難キ者ヲ所謂  
性甲狀腺腫トナスヘシ抑モ該腫ハ全ク新生セ

ル増質ヨリ發生スルモノト確定シ難ク又甲狀腺小囊体中ヨリ生スル粘液様ノ分泌物ヲ集積スル者ト認メシ難シ如何トナレハ若シ此含蓄物ノミ、真ノ分泌物ト做ストキハ該囊腫ハ分泌閉止性囊腫ニ属セサル可カラサルハ故ナリ又甲狀腺小囊体中ノ含蓄物ヲシテ諸學士ノ説ノ如ク平常單純ノ細胞ヨリ成ル者トシ甲狀腺分泌ノ語ヲ用フルヲ穩正ナラサルモノト做ストキハ粘液様軟化ニ由テ生セシ新生囊腫ニ属スルモノトナスコトヲ得ヘキヲ以テナリ總テ甲

狀腺中ノ囊腫ハ孤生スルヲ多シトス而シテ非常ニ増大スル性アリ然レモ時トシテ大或ハ小ナル甲狀腺腫中ノ各所ニ囊腫ヲ簇生スルコトアリ其壁ノ裏面ハ常ニ滑澤ナリ而シテ其形狀分泌閉止性囊腫ニ類ス甲狀腺ニ生スル軟化機ハ常ニ粘液様流動物ニ由テ結局ヲナスモノナリ或ハ時トシテ灰白ノ糜粥様物ヲ蓄フルコトアリ故ニ脂腺ノ閉塞ニ由テ生スル囊腫ノ含有物ト其外見者同ク然レモ甲狀腺ノ軟化ニ由テ生セシ者ハ只其組織ノ頽敗セシモノニテ含有スル



夕和道言  
卷十三

川天室龍成

ヲ異ナリトス

複<sup>コシブリチールテチーステ</sup>雜性囊腫ハ既ニ論述スルカ如ク乳腺ノ囊腫  
性肉腫、卵巢囊腫、睪丸囊腫、囊腫性腺腫、囊腫性肉  
腫及囊腫性癌腫等之ニ屬スヘシ輒近ノ検査ニ  
據レハ此ノ如キ複雜性囊腫ハ多クハ生理的作  
用ニ於テ甲状腺<sup>ホルケル</sup>或ハ卵巢<sup>ホルケル</sup>ヲ  
生スル如ク其初葡萄狀腺質或ハ管狀腺質ヲ新  
生シ而シテ此空腔ヲ具フル囊様体其末端ニ於テ  
括斷セラル、并ハ即チ囊ヲ成シテ全ク分離ス  
然ル片ハ其中ニ粘液様或ハ帶褐黃色或ハ帶褐

赤色或ハ帶褐黑色ノ流動物ヲ分泌ス然ルモハ  
曾テ顯微鏡ニ由ラサレハ明著ナラサル細小ノ  
ホリケル<sup>ル</sup>漸次擴張シテ増大ス若シ此ノ如キ數  
多ノホリケル<sup>ル</sup>相混同シテ一大空腔ヲ成ス并ハ  
則チ非常ニ大ナル卵巢水腫ヲ成スモノナリ其  
大ヤ凡ソ九ヶ月ヲ經タル妊婦ト腹形ヲ同フス  
又數多ノホリケル<sup>ル</sup>相集合シテ各區ニ分畫スル  
囊腫ヲ成スモノアリ即チ卵巢ノ重<sup>ムル</sup>複<sup>チ</sup>性<sup>プ</sup>囊腫ナ  
リ罩丸ニアリテハ此ノ如キ作用ニ由テ囊腫ヲ  
生スルコト卵巢ニ比スレハ稀ナリ乳腺及ヒ罩丸

ニ於テハ其囊腫中ニハ粘膠様流動物ヲ含蓄ス  
ルヲ常トス然レモ又時トシテ此ノ如キ卵巢或ハ  
畢凡ノ囊腫中ニハ脂肪ヲ分泌シ或ハ多量ノ表  
皮ヲ産出スルヲアリ故ニ畢凡ノ贅腫中時トシ  
表皮集結シテ黍大或ハ豌豆大ノ結節物ヲ成ス  
モノヲ發見スルヲアリ或ハ時トシテ脂肪ヨリ  
成ル糜粥様物ヲ發見スルヲアリ大ナル卵巢囊  
腫壁ノ結構ハ皮膚ノ皮膚様囊腫ニ比スレハ大  
ニ高等ニ位スルモノトス即チ毛髮或ハ脂腺、肝  
腺、乳嘴体加之疣様ノ贅腫ヲ其壁ニ發見スルヲ



少ナカラス又時トレテ齒牙ヲ具フル軟骨或ハ  
硬骨ヲ發見スルヲアリ其形甚タ諸般ナリトス  
是レ胎兒ノ卵巢ニアリテ十全ノ發生ヲ成ス  
ヲ得サリシ殘物ナリト人ノ妄想スル所ナリ  
其他薦骨部ニ於テ先天ニ重複性囊腫ヲ生スル  
ヲアリ而シテ其中ニ擅毛内皮胞或ハ腺質ニ類  
スル者ヲ發見スルヲアリ

囊腫中ニ十全流動性ノ靜脈血ヲ含有シ而メ其  
内面滑澤ナルモノナリ此ノ如キ囊腫ハ之ヲ刺  
穿シテ含有物ヲ漏出スルトキハ或ハ速カニ或

ハ徐々ニ再ヒ同物ヲ潑留スルモノナリ體中腋窩、瞠及ヒ頸ニ生ス該腫ノ含有物ハ固ヨリ單純ノ血液ニシテ粘液若クハ汚乙液等ニ血液ヲ混セシ者ニアラスト確定スルトキハ蓋シ靜脈ノ非常ニ擴張シ若クハ海綿質樣靜脈腫ノ網樣組織消耗シテ斯ク大ナル空腔ヲ成セシモノニ他ナラサルヘシ

**鑑定** 囊腫ハ總テ按摸シテ之ヲ診スレハ多少波動ヲ覺フヘシ鑑定困難ナルモノニアラス然レモ深在スルモノニアリテハ時トノ鑑定困難ナ

ルヲアリ而シテ囊膜ヲ具フル流動物含蓄ノ空  
腔ト誤リ易シ如此キ疑似ノ症ニアリテハ細キ  
探膿針ヲ刺穿シ内有物ノ何タルヲ察シ鑑定ヲ  
明カニシ然ル后處置スヘシ其他囊腫ト誤リ易  
キ者アリ例之寒膿腫或疼痛ナク漸次發育セシ  
波動アル諸贅腫或ハ胞虫<sub>エヒノコクス及ヒ</sub>  
誤リ易シ其他皮下粘液囊及腱鞘ノ水腫或ハ脊<sub>ス</sub>  
推水腫等ト誤ルヲアルヘシト雖体中此ノ如キ  
腫物ヲ常ニ發生シ易キ部局ヲ了知スルモノニ  
アリテハ鑑定ヲ誤ルヲ稀ナルヘシ



外科新書  
卷之十一  
癰疽

川  
堂  
前  
版

療法 囊腫ヲ治スルニ二法アリ一ハ含蓄物ヲメ

漏泄セシメ或ハ局所刺戟ニ由テ炎機ヲ起サシ

メ囊ヲ萎小セシムルニアリ一ハ囊ヲ全ク剔除

スルニアリ殊ニ剔除法ハ單易ニメ且ツ速ニ効

ヲ奏シ易キノミナラス危險ナラサルヲ以テ他

法ニ勝レリトス然レモ卵巢ノ囊腫或ハ甲狀腺

囊腫ノ如キモノニアリテハ其所在深遠或ハ其

局部貴要ナルヲ以テ剔除法ノ外他ニ治術ノ目

的アレハ可及的剔除法ヲ施サ、ルヲ良トス含

蓄物ヲ漏泄セシ後ニハ一ハ局部ニ刺戟ヲ與ヘ

テ化膿ヲ促シ一ハ輕易ノ炎機ニ由テ囊ヲ萎小  
セシムヘシ即チ囊腫壁ヲ全徑ノ長サニ於テ割  
開シ然ル后乾撒系ヲ挿入シ或ハ刺戟性ノ流動  
物ニテ時々洗滌スルトキハ日ヲ經ルニ從テ醗  
膿シ或ハ肉芽ヲ生シ曾テ囊腫ノ裏面ニ存セル  
病性產物全ク除去スルトキハ囊ハ漸次萎小シ  
テ癰痕質ヲ成シ遂ニ治スルモノナリ又此ノ如  
ク皮膚ヲ割開セスメ同様ノ目的ヲ達スルヨヲ  
得ヘシ即チ囊腫ヲ刺メ系線或ハ細キ護膜管等  
ヲ貫穿スルトキハ其刺戟或ハ外氣ノ侵入ニ由

テ化膿シ日ヲ經ルニ從テ肉芽ヲ發生シ遂ニ萎  
小シテ治スルコトアリ其他刺穿メ含蓄物ヲ漏ラ  
シ然ル後沃顙丁幾ヲ注入スルニ由テ右ノ如キ  
結果ヲ得ルコトアリ但シ沃顙丁幾注射ハ囊腫含  
蓄物ノ軟化セシ組織ヨリ成ル者ニ適セス只囊  
ノ裏面ヨリ流動物ヲ分泌スル者殊ニ沔乙液或  
ハ粘液等ヲ分泌スル者ニ適中ス而シテ沃顙丁幾  
ハ甲狀腺囊腫ニ注射シテ偉効ヲ見ルコトアリ總  
テ沃顙丁幾ノ注入ハ一時炎機ヲ起發スルモノ  
ニシテ時トシテ劇シキ化膿性炎ヲ續發スルコト



ナキニアラス豈注意セサルヘケンヤ其他囊腫  
壁ノ著シク肥厚スル者ニハ適中セス例之頸ノ  
囊腫ニ於テ之ヲ見ルカ如シ卵巢囊腫ニハ功ヲ  
奏スルヲ稀ナリ輒近截腹術<sup>ラパロトミ</sup>ニ由テ囊腫ヲ切除  
スルノ術ヲ以テ確實ノ手術トナセリ近來諸家  
ノ實驗ニ據ルニ往時ニ比スレハ豫后ノ善良ナ  
ルヲ表セリ

外科通論卷之二十三 終





東京第四大區四小區  
湯島五丁目十三番地

出版人

佐藤尚中

右同所

述人

佐藤進

發兌書林

馬喰町二丁目五番地

島村利助



